

小川氏の経歴

- 1969 信州大学農学部卒業
- 1971 北海道大学大学院 農学研究科博士課程修了
- 1978 北海道庁勤務
- 1984 道庁を辞職して 野生生物情報センター設立
- 1990 野生動物救護研究会を立ち上げる
- 1991 **パブル景気崩壊**
- 1992 **地球サミットが開催される** エコ・ネットワークを設立
- 2000 **環境省自然環境局に 野生生物保護対策検討会 移入種問題分科会が 設置される** 『四季の自然とふれあう 生きもの生活白書』を出版
- 2001 **北海道希少野生動物植物の 保護に関する条例が 施行される**
- 2005 **特定外来生物による 生態系等に係る被害の防止に関する 法律が施行される** 『あなたはクマやハチと 共存できますか?』を出版
- 2009 酪農学園大学 環境システム学部教授就任
- 2011 **北海道庁にエゾシカ対策室が新設される**

12

小川 巖さん

エコ・ネットワーク代表／酪農学園大学環境システム学部教授

成熟してきた 市民の「野生動物観」

おがわ・いわお 1945年、北海道松前町生まれ。信州大学農学部卒業、北海道大学大学院農学研究科博士課程修了。北海道庁勤務後、1984年、野生生物情報センター設立。1992年、エコ・ネットワーク設立。著書に『あなたはクマやハチと共存できますか?』（エコ・ネットワーク、2005年）など。「ガンさん」の愛称で知られる。

全道500万人がお客さん

「野生生物情報センター」を作ろうとしたのはね、じつは道庁職員がイヤになったというのがあって（笑）。32歳の時に北海道庁生活環境部に技師として中途採用してもらったのに、5年と2カ月で退職したという不良公務員ですよ、言ってみれば（笑）。

冗談はさておき、やっぱり花・木・野鳥・動物とか、いつどこに行けばどんな種類が観察できるか、個別に情報を持っているグループはありましたけど、当時はそれを横断的に情報発信する機関がなかったじゃないですか。

自分たちだけでウォッチングを楽しむというレベルを超えて、野生生物とどういふふうに関わったらいのかということ、役所はそれなりのことを言っていましたけれども、市民の目線っていうのは無かったわけだね、それをほくらでできれば、という思いはあったんです。

公務員時代から、そういうことを相談し合う仲間はいたんです。「あったらいいね」という話が。普通だったらそこで話が終わるんだけど、バカなやつが何人かいた（笑）。島田明英君^[1]、丸山博子さん^[2]、住友順子さん^[3]、長谷川哲雄君^[4]、そういうのが中心となって。

それで、普通の市民の人たちにももっと自然を知ってもらいたい、楽しんでもらいたいという気持ちで発行し始めたのが『北海道ウォッチングガイド』^[5]という月刊情報誌です。

それが1984年でしょ。当時は景気がどんどん上向いていて、社会全体に余裕もできて、自然とか環境とかといったものに関心が向き始めていました。

自分たちに力とか知恵があったっていうんじゃないで、もちろんそれなりのことはしたと思いますけれど、大きなうねりの中にぼんって乗って、それで開かれたような面もあったと思います。

[1]島田明英君 自然ウォッチングセンター代表。

[2]丸山博子さん 丸山環境教育事務所代表。

[3]住友順子さん 日本野鳥の会札幌支部事務局長。

[4]長谷川哲雄君 植物画家。

[5]『北海道ウォッチングガイド』現在は「自然ウォッチングセンター」が発行。

[6]野生動物救護研究会
獣医師、野鳥保護関係者、
市民などで結成。事務局・
エコ・ネットワーク内。

[7]オーバーブリッジ 草原
や森林を貫通する道路は野
生動物たちの自由な移動を
妨げるだけでなく、自動車
と野生動物の衝突事故の
多発を招いている。野生動
物の道路内への侵入を防ぐ
施設として、野生動物専用
のオーバーブリッジ(高架
橋)、ボックスカルバート(道
路下に埋め込むトンネルユ
ニット)、各種フェンスなど
がある。

「対立」から「協議」へ

当時の財政事情ですか？ みんな不思議と食べていけましたね(笑)。その代わりに、常時結構いろいろやりました。そのころ、専任のスタッフを抱えて自然分野について専門的なレクチャーやガイドサービスをやるってところってのは、まずなかったんじゃないですか。だから仕事のオファーもけっこう集まりました。

振り返ると、やっぱり一番の変化は景気ですよ。バブルがはじけたのが1990年ごろ。ぼくが1984年ごろからやっていますから、そういううねりの中にすっぽり入って、その時はもちろん分かってないですよ、そういうの。だけど今から考えてみると「なるほど」っていうようにね。

もうひとつ、役所の意識もずいぶん変わったと思います。

たとえば、野生生物の救護のことです。野生生物情報センターを開いたら、「飛べなくなった鳥がいるけどどうしたらいいですか？」とか「道路でケガしてうずくまっているキツネがいる」とか、問い合わせがよく入るようになりました。この問題をどうするか、みんなで一生懸命考えました。当時は野生動物を収容して何とかする機関というのはありませんでしたから。

1990年に「野生動物救護研究会^[6]」っていうのを立ち上げて、道庁や環境庁にも支援を要請したり、ずいぶん交渉したりしてきたんですね。役所は初めのうちは「あんたたちは何言ってるんだ」という調子でした。「野生生物にお金を回したりしたらと納税者に後ろ指を指されるだろう」って、平気で言われました。

こっちも作戦を工夫して、野生動物のロードキル(交通事故)を無くすために、事故の起きそうなポイントにシカなどが安全に渡れるオーバーブリッジ^[7]を架けることにすれば、工事費は地元で落ちるから納税者も文句はないだろうとか(笑)。

ところがね、1990年代の初めころから役所側の様子が変わってきたんですね。いまはもう当たり前のように、ここで野生動物の

事故があるんだから、こういうふうにしたらどうって話をしに行ったら、どういう構造がいいんですか、みたいなところに話がトーンと行っちゃうんですよ。

それまでぼくら、どっちかっていうと行政と対立的にきたわけです。それがだんだん、こっちの言っていることが通るようになってきた。それはいいんだけど、今度はこちらが代わりの知恵をいかに出すかということを問われるわけです。ダメなことをダメと言っぱなしでは済まなくなって、「じゃあ、どうしたらいいんですか」と逆質問を受けた時に、答えられるものをわれわれは持っていないと通用しなくなりました。

そういう意味じゃあ、われわれの側も変化してきたと言えますね。エコ・ネットワークを立ち上げた1992年、奇しくも地球サミットが開催された年ですが、何かあのころから、いろんなものがこう、変化してきたように思います。

札幌市民から消えた「クマ憎し」の感情

じつは野生動物にかかわる問題も、ちょうど同じころから質的に大きく変化してきているんです。かつては野生動物の問題といえば、減っていく動物をどう救うかが一大テーマでした。絶滅寸前のタンチョウ^[8]を守れ、とか、そういうものしか話題にならなかった。北海道ではすでにエゾシカが激増し始めていたんですけど、増えてどうなるとか、外来動物がどうのこうのというのは、ほとんど問題にされなかったんですよ。

さきがけはセイタカアワダチソウで、1980年代かな。外来のものがはびこっていろいろ問題を引き起こすみたいなことで。それで、減っていく生き物への関心だけでなく、逆に増えていく生物たち、さらにセイタカアワダチソウだとカライグマ^[9]だとかの外来生物がそこに加わって、新しい環境問題として捉えられ出したんです。

さっきのタンチョウもそう。推定個体数^[10]がいま1300羽くら

[8]タンチョウ 国の特別天然記念物。「種の保存法」に基づく国内希少野生動物種、環境省レッドデータブック絶滅危惧種、北海道レッドデータブック絶滅危惧種。

[9]アライグマ 北米原産。環境省特定外来生物。北海道ブルーリスト緊急に防除対策が必要な外来種。

[10]タンチョウの推定個体数 北海道釧路総合振興局の「タンチョウ生息状況一斉調査」によれば、2012年1月のカウント数は過去最高の1143羽だった。カウント漏れを含め、全道の生息数は約1300羽と推定されている。

いです。1980年代まで「このままでいけば絶滅してしまう」みたいに言われていたものが、保護対策のおかげで徐々に増えてきたのはよかったです、そのせいでいろんな問題を引き起こしているんですよ。

タンチョウって、姿が美しいからトクな動物でね(笑)、実態はカラス並みのことをやるわけですよ。畑のトウキビをどんどんつば

んじゃうとか、少し伸びてきた苗を踏んづけてしまうと、牛舎の中に入ってきて大切な飼料を食べちゃうとか、交通事故も……。いろんな問題を引き起こしているんです。

ゼニガタアザラシ^[11]も同じパターンです。襟裳岬だけで400～500頭いるんですが、漁業被害が深刻化してきている。昭和時代に毛皮目当てのひどい乱獲があって、1980年代には確かに絶滅寸前までいってたんです。でもそれから保護対策がうまくいって、今度は数のコントロールが効かなくなっちゃったんですね。増えればいいという非常な定性的なことでものを言っていて、あるラインを越しちゃえばいろんな問題が出てくるという、そういう段階に来ちゃっていますね。エゾシカ^[12]も同じですけど、人間の経済活動との軋轢がなければ、青天井で増えたって問題ないわけですよ。だけどそういうもんじゃないよね。

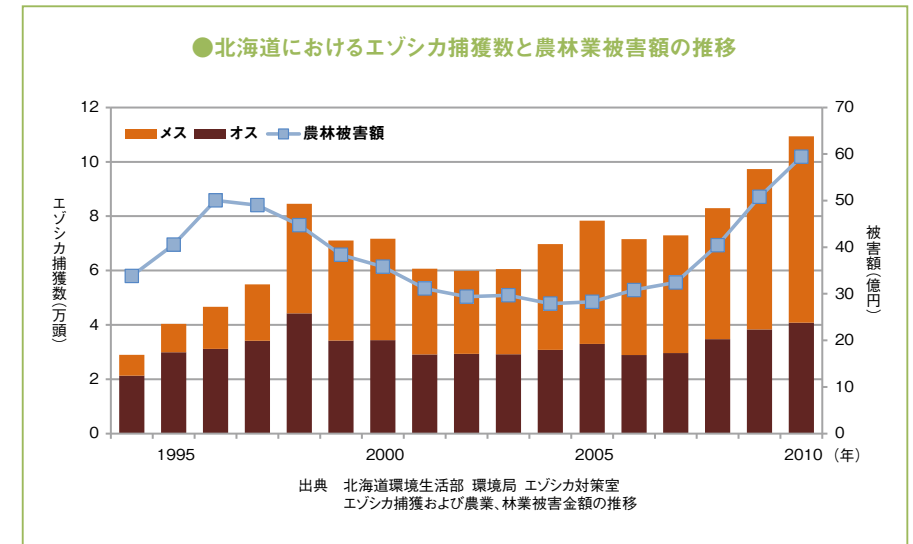
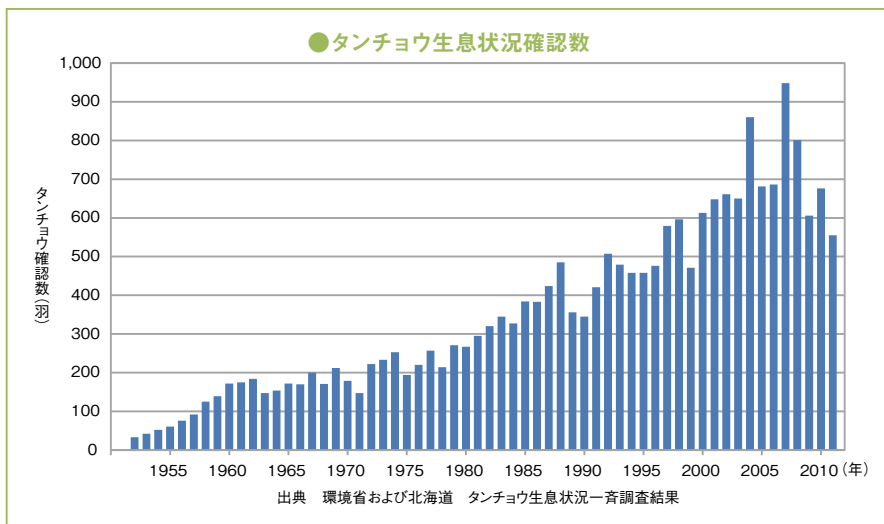
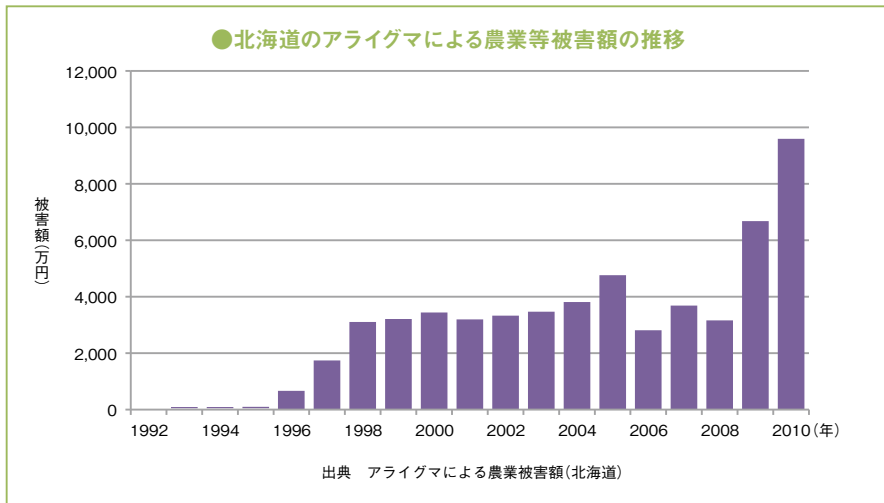
クマ^[13]はまた、おもしろい(笑)。この秋も札幌の住宅街でひんぱんに目撃されたって、騒ぎになっていますよね、おれの家すぐ近くだけど(笑)。

おもしろいというのは、クマの出没そのものより、人間の受け

[11]ゼニガタアザラシ 北半球の北部海域などに5亜種。北海道では、太平洋岸の襟裳岬(えりも町)と大黒島(厚岸町)に大きな上陸場があり、繁殖している。環境省RDB絶滅危惧種、北海道RDB絶滅危惧種。

[12]エゾシカ 東アジアに広く分布するニホンジカの仲間、北海道固有亜種。1998年から北海道エゾシカ保護管理計画対象種。

[13]クマ 北半球に広く分布するヒグマの仲間のうち、エゾヒグマは北海道固有亜種。石狩西部、手塩・増毛地域個体群は環境省RDB絶滅の恐れのある地域個体群。



[14]円山 標高226m。19世紀、明治政府が札幌地方に行政都市を建設するさい、最初に基準の幹線道路（南一条通り）の位置を定めたが、その西の起点とされた。同時期、原生林が薪炭採取のためにほぼ皆伐された後、外来樹種などの植樹により二次林が成長。「円山原始林」の名で天然記念物。東部の裾野は住宅街・商業地。

[15]藻岩下 札幌市南区。藻岩山（531m）南東部のふもとに位置する住宅街・商業地。

とめ方が変わったということを感じるんです。去年の秋、円山^[14]のふもとに出ましたよね。あそこの人たちに聞き取り調査すると、道内の他の地域と比べてもね、「クマが出てこないように何とかしろ」という声はありますけれど、「何とかしろ」の中に、全部殺しちゃえとか、罠で獲っちゃえという人が、札幌では非常に少ないですよ、意外や意外で。札幌市民は冷静なんです。少なくとも「クマ憎し」みたいな感情はない。

クマは記憶力がすごくて、いちど味をしめるととことん執着します。たとえば煎餅の味を覚えると、頭の中が煎餅一色になっちゃうんです。だから人間の近くに来ちゃったりするんでね。「出没を防ぐにはどうしたらいいと思いますか」という質問項目で、円山の住民の方たちは「ごみの処理をきちんとするのが第一」と答えた人がトップだったと思います。住民のみなさん、非常に冷静で、よく勉強されてるんです。

今年の春、藻岩下^[15]で一頭が射殺されました。親しい新聞記者が教えてくれましたが、住民たちからは「なんで殺したんだ」という声が圧倒的に多く聞かれたそうです。以前だったら「よくぞやってくれた。これで安心した」という声が多かったのに、

本当にずいぶん受けとめ方が変わってきたな、と感ずますね。行政とマスコミは相変わらずですけど（笑）。この変化にどういう背景があるのかは、まだ読みきれないんだけど。

お土産は「生活を見直すきっかけ」

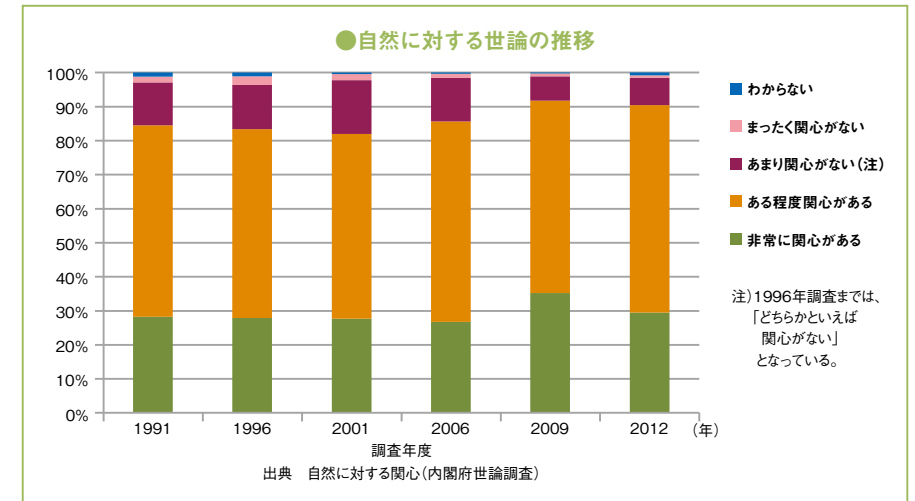
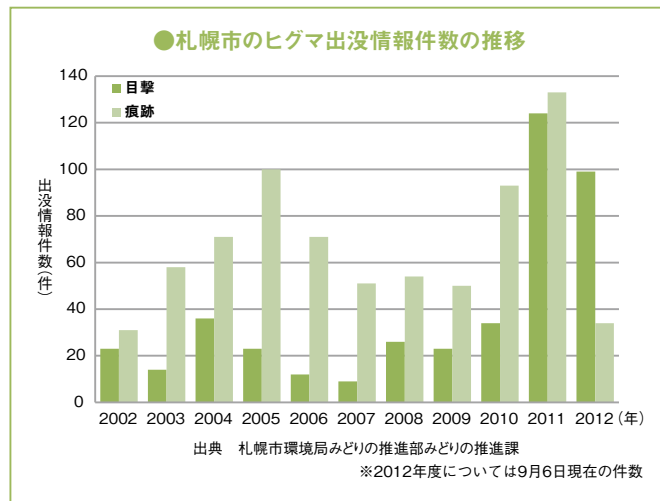
ぼくらがやってるプログラムの参加者も変わってきてると思いますよ。ぼくらはもう旧來型の、どこでもやっているようなイベントはやりません（笑）。だれもやっていないようなことを自分たちで作り出しています。そこに興味を持って参加してくるっていう人は、どこのグループにも所属はしていないけれど、関心を持っている人たちだと思うんですよ。そういう人が増えてきたと思います。

フリーハンドでいろんなことが企画できるのが、一般ウケするひとつの要素じゃないですか。1994年に初めて企画した「英国フットパス^[16]ツアー」は、『ピーターラビット』^[17]シリーズで有名な湖水地方^[18]を訪ねたんです。実はおれはピーターラビットのこと何も知らなかったんだけど（笑）、募集したら女性ばかり20人くらいきた。すごかったですよ。詳しい。オタクなんてもん

[16]フットパス イギリス発祥の歩く道のこと。森林公園、田園地帯、堤防沿い、あるいはひとつの町村の中だけで完結するのではなく、多様な環境を含み、他地域とつながりをもっているもの。

[17]「ピーターラビット」 ロンドン出身の絵本作家、ビアトリクス・ポターによるキャラクター。

[18]湖水地方 イングランド北西部のリゾート地。氷河によって形成された渓谷に大小無数の湖沼が点在する。



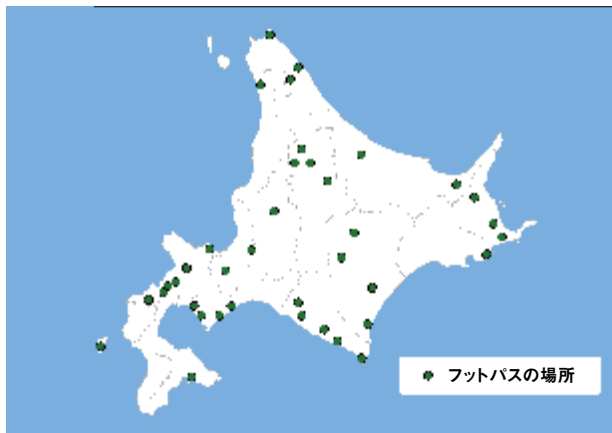
じゃないんだよ（笑）。それが始まりで、いま道内あっちこちでフットパス運動が始まって、すごい勢いになっていますから。

エコ・ネットワークには、垣根があって、ない。敷居はあっても、低いからだれでも入ってこられる（笑）。だからわれわれのイベントの参加者の方たちは、ほとんどが「一見さん」です。一般的な「ナントカの会」だったら、いつもリピーター同士だか



トラクターのバンク被害を防ごうと、えりも町で開いた「エゾシカの角拾いボランティア」ツアーの様子（写真提供・小川巖氏）

●北海道内のフットパスマップ



出典 佐藤里香氏卒業論文(2010年酪農学園大学)より作成

ら、いろんなものを順をおって伝えやすい、というはあるでしょう。でもほくらはそうはならない。だけどやっぱりね、一期一会のこの機会に自分の生活を見直すきっかけのひとつでもお土産に持って帰ってもらえればいいなと思ってやってるんですよ。

以前から、親子キャンプやなんかの時に、今でいう節電の話をちよくちよく、特に親御さんにしています。

キャンプだから、普通電気はない。だったら自分でロウソクを作って楽しもうよと。電気のない生活は不便かもしれないけど、それも考え次第で、「薄暗い世界もけっこういいジャン」みたいな（笑）。

そうやって話を始めて、こう質問します。「みなさんの家族がどれくらい電気を使ってるか知ってますか」って。たいてい答えられないんですよ。特にお父さんがダメね（笑）。だからまずそこから始めてみましょう、と。レシート見れば分かるんだから。

アンペアダウン^[19]の話も、そういうのを家族ぐるみでやったらおもしろくできますよ、って20年くらい前から言ってたんですけど、ほとんど反応なかったですね（笑）。そんなの電話1本で、10Aで315円くらいかな、安くなるんだから。いま電気が上がるって騒いでいるけど、10A下げればその分くらいすぐにカバーできるじゃん。ところがね、今年もそういう機会があつてこの話をしたら、ちょっとやっぱり反応が違いますね。きっかけがないと伝わんねえのかなって感じたんだけど。

今だってね、やること、やれることは無限にあるんじゃない？

ほくらはたから見れば「あの人は環境系」「自然系」とレッテルを貼られていると思うんです。だけどそんな枠を自分で外して、たとえば教育分野とか福祉系とかと付き合いがあってもいいのかなと思っています。そういう組み合わせを考えていけば、もっともっとうろんなのが出てくるんじゃないでしょうか。

(2012年9月3日取材)

[19]アンペアダウン 電力会社と結ぶ契約アンペア量のランクを下げることで、基本料金が安くなる。



「炭焼き体験ツアー」で手製の炭焼き窯をのぞきこむ参加者たち（写真提供・小川巖氏）